

宜野湾シティーFM 第1回放送内容

さて、今日は初回ということで「国立病院機構沖縄病院」を紹介させていただきます。

皆さんは『沖縄病院』と聞いてどのようなイメージをお持ちでしょうか？結核や神経難病、がん・・・などなど、治療に難渋する疾患の「終着駅」と考えてはいませんか？むしろその逆で、現在では結核、肺がん、脳・神経・筋疾患を的確に診断し、治療に結びつける、あるいは最先端の治療をするセンター的機能を有する専門医療施設です。どちらかといいますと「始発駅」と考えています。

また結核医療・神経難病に関しては「国の政策医療」として今なお、その役割を担っています。

それでは沖縄病院の創設の経緯からお話しします。終戦後、結核の蔓延で多くの国民が苦しんだ時代があり、多くの結核患者が命を落とし、結核が「不治の病」と呼ばれた時代がありました。

沖縄県においては、1948年に沖縄民政府公衆衛生部金武保養院として金武町に公立の結核療養所として100床で開設されました。

1952年には琉球政府創立に伴い、名前も『琉球政府立金武保養院』と改称しました。その後も結核患者は増え続け、1968年には461床となりました。

そして、1972年の日本復帰に伴い、『国立療養所金武保養院』と改称しました。

1978年には政策医療のもう一つの柱である『筋ジストロフィー病棟』を新設し、現在の宜野湾市我如古に新築移転してまいりました。そして、病院の名称も「国立療養所沖縄病院」となったわけです。あれから、38年の歳月が流れました。筋ジストロフィー病棟は神経難病病棟と名前を変え、昨年12月に新築・建て替えし、「脳・神経・筋疾患研究センター」も併設いたしました。

沖縄県難病医療拠点病院として、今後増え続けると予想される認知症から変性疾患まで、指導医・専門医を含め、7人の神経内科医師が診療に携わっています。

お話を戻しますと、現在、結核は減少を続け、今では50床の一病棟のみとなっています。その反面、肺癌は年々増加を続け、とうとう1999年には日本人の悪性腫瘍での死亡数が第1位となったわけですが、沖縄県ではすでに1981年に肺癌が胃癌を抜いて第1位になっていました。大腸癌も同様に全国では大腸癌が死亡数で胃癌を抜いて第2位になったのは2013年でしたが、沖縄県では1998年でした。沖縄県の疾病構造は15-20年先の日本の疾病構造を示していると言えます。

当院では呼吸器外科指導医・専門医を含め 6 人の呼吸器外科スタッフが診療に従事し、専門医育成基幹病院として年間 100 例以上の手術実績を有します。

また呼吸器内科部門も指導医・専門医合をわせて 6 人のスタッフで化学療法や気管支鏡検査を行い、内科・外科合わせて年間 200 人を超える肺癌の新患の診療にあたっています。病院創設期の結核診療から今や肺癌をはじめ間質性肺炎に代表されるびまん性肺疾患や COPD、気管支喘息といった幅広い呼吸器疾患に対し専門性の高い診療を行っています。

消化器部門においても、男性の消化器専門医師のほかに、女性の消化器内視鏡専門医が特に女性の皆様の検査・治療の相談に応じますのでお気軽に受診してください。

最後に当院の診療科を紹介させていただきます。当院の診療科は一般内科、神経内科、呼吸器科、消化器内科、一般外科、呼吸器外科、整形外科、放射線科、麻酔科、病理診断科などです。一部を除き紹介状がなくても受診可能な診療科が多いですので、診療時間などお問い合わせの上お越しくください。

以上簡単に現在の沖縄病院を紹介させていただきました。**当院の基本理念は「患者様の立場を尊重し、高度で良質な医療を提供します」**です。患者さんに**「ぬちぐすい」**とだけ思っていただけの医療・看護の提供をめざします。

市民の皆さまからのご質問にはこの番組もしくは国立病院機構沖縄病院のホームページで回答したいと思っております。ご質問をお待ちしております。